

# プラハのドイツ語について

十 河 健 二

本論は、1. チェコ。2. プラハ。3. 「ドイツ化」。4. プラハのドイツ語。5. プラハのドイツ語の評価、の構成となっている。1および2では、チェコとプラハの歴史を必要な範囲内で、3および4では政治・経済・文化的な視点からプラハのドイツ語の周辺事情を簡潔に観察し、5. プラハのドイツ語に与えられる評価を取り上げる<sup>1</sup>。

## 1. チェコ

チェコの歴史はチェコ人、チェコ語とドイツ人、ドイツ語もしくはチェコ文化とドイツ文化の交流記録と言える。またドイツ化をめぐる様々な事件の記録でもある。

9世紀に興った大モラヴィア王国が10世紀初めにマジャール人の侵入で滅んだ後、白カルパチ山脈があたかも分水嶺のように作用して、ボヘミア、モラヴィアの人々はドイツの文化、スロヴァキアの人々はハンガリーの文化の影響を受けて発展する。白カルパチ山脈の西ではプシェミスル家がボヘミアを統一する。東はハンガリーの支配下であった。この分離発展は1918年、チェコスロヴァキア共和国建国で統合されるが、1993年1月1日、チェコ共和国、スロヴァキア共和国として再度分離した。そして意外にも、ドイツ人の入植は白カルパチ山脈の西よりも東の方が早かった<sup>2</sup>。

民族王朝のプシェミスル朝（850年頃－1306年）が断絶した後、ドイツ系のルクセンブルク家をボヘミアに迎えたことが、おりからのドイツ人移住を加速させ、またドイツ化の伏線はここに敷かれる。

ボヘミアでは神聖ローマ帝国との関係が進むにつれ、移住ドイツ人の影響が社会の各方面に現れる。11世紀、ドイツ人の聖職者、商人はボヘミアで活動する許可が与えられ、農村では大多数を占めるチェコ人と共

存している。

12世紀になると、チェコ人領主は、ボヘミアの山岳地方開拓のためにドイツ人農民の移住を奨励し、租税の増収を計る。西欧の大規模な開墾を倣ったのである。

12世紀末から13世紀にかけて、ボヘミアの都市で多数派はチェコ人であったが、ドイツ人は文化的にも経済的にもチェコ人に対して優位を保っていた。ドイツ人はチェコ人と友好的な共存関係を維持し、この二つの民族がボヘミア国内で対立することはなかった<sup>3</sup>。

この点、ノルマン・コンクエスト（1066年）後のフランス語とは事情が異なる。もちろんノルマン人はイギリスに招かれたのではない。フランス語が宮廷と上流階級の言語であり、英語は民衆の言語だった。英語がイギリスの母語となるのは14世紀である。

さらに、アメリカ合衆国におけるイギリス人植民者のように領邦のドイツ人が、ドイツ帝国の名の下における領邦征服者と思っていた、ということを示す情報もどこにもない。それどころか、ドイツ人植民者はその土地の支配者に信の厚い臣下だった。この頃はまだ「国家」の意識ではなく、共同体所属、貴族や国王に臣下として仕えるという意識があったに過ぎない<sup>4</sup>。

14世紀、ボヘミアは移住ドイツ人の社会活動によって繁栄するが、同時にドイツ化も進行する。依然チェコ人とドイツ人との関係は全体として良好であった。しかし、ブランデンブルク辺境伯のオットーがオタカルの子、ヴァーツラフ二世（Václav II, 在位1278—1305年）の摂政としてボヘミアに赴任してから、ボヘミアではドイツ人への反感が芽生える。その文献として、『ダリミルの年代記』（14世紀前半）を挙げることができる<sup>5</sup>。

1355年、ルクセンブルク家のヨハン（Johann, 盲目王, 在位1310—1346年）の子カレル一世（Karel I）, 神聖ローマ帝国皇帝即位（1378年までボヘミア王）。カレル一世はシチリアの金印勅書でラテン語、イタリア語、ドイツ語、チェコ語を神聖ローマ帝国の言語としている。（Skála 1964, S. 76ff.）その中でチェコ語が公用語としてボヘミア王国の第一の言語だった。ボヘミア王国はこの時代に繁栄の絶頂期を迎え、チェコ語

も安定期を迎える。その黄金時代はカレル一世の死（1316—1378年）とともに終わりを告げる。

## 2. プラハ

ブラハと呼ばれる所は乾燥し、痩せた耕牧地だったと言われる。880年代、キリスト教の洗礼を受けたプシェミスル家のボジヴォイ一世（Bořivoj I）がギリシャ人宣教師コンスタンティノス（Constantinos）とメトディオス（Methodios）の布教活動により、ヴルタヴァ川上流左岸の小高い丘に聖母マリアをまつるロトンドを建立し、同時にあるいは程なくしてそこを居所としたのが、ブラハ城である。今日のブラハはここから発展している。ブラハはこの頃からすでに交通の要所であった。付近には幹線道路が通じ、ヴルタヴァ川の渡河地点があった。左岸には商人の住居地や市場があった<sup>6</sup>。

以後、ブラハはボヘミアを支配した民族王朝の中心的な都市、交易の中継地として発展し、また様々な民族が行き交う西欧と東欧との通商路となり、ヨーロッパ各地の商人にとって国際的な集積地となった。ドイツ人の商人や職人が多数定着し、彼らの活動はブラハ発展に貢献した<sup>7</sup>。

ブラハはその発展段階で四市すなわち、旧市街、新市街、フラツチャニ、小市街が建設される<sup>8</sup>。行政もそれぞれに独立していた。ヴルタヴァ川左岸にある小市街は、プシェミスル朝期、オタカル二世（Otakar II, 在位1253—1278年）が13世紀に移住ドイツ人を住まわせるために開発した地区である。後世、ヨーゼフ二世（Joseph II, 在位1780—90年）は1781年から1784年にかけてこれら四都市を統合する。四都市の市民台帳が一括して管理されるのは1783年以降である。（Mayer 1928, S. 257.）

## 3. ドイツ化

3.0. 「ドイツ化」や「チェコ化」という表現にはする者とされる者との従属関係が潜む。チェコの歴史ではチェコ人が常に表舞台に立っていたわけではない。ドイツ人の東方植民を挙げるまでもなく、ボヘミアの地に居住するこのスラヴ人は常に西欧の影響を受けて今日に至っている。ドイツ語を使用した、あるいはしなければならなかった時代を通して芽

生えたチェコ語の言語純粹主義は反ドイツ化の一つである<sup>9</sup>。

チェコ史上「ドイツ化」は通常、カトリック信仰のハプスブルク家が1526年にボヘミア・ハンガリーを統治し始めてから、またプロテスタントがカトリックに屈したシュマルカルディン戦争（1546—1547年）、さらに30年戦争（1618—1648年）の局地戦であるピーラー・ホラの戦闘（1620年11月8日）以降、ボヘミアで施行されたハプスブルク家の宗教政策を指す。チェコ史ではこれを「カトリックによるボヘミアのドイツ化」（*kathorische Germanisierung Böhmens*）と呼ぶ<sup>10</sup>。

しかしながらフス以前のチェコ人の社会であっても、ドイツ化は11世紀に見られるドイツ人入植と共に進行する。14世紀以降のプラハのドイツ語の時代、すでにドイツ人がチェコ人の社会で生活を営み、同時にドイツ語がチェコ人の社会で使用されていた。ルクセンブルク朝、カレル一世の時代もドイツ化は進行していたのである。フスはチェコ史上、ドイツ化に抵抗した15世紀最初の人だった。

13世紀から14世紀にかけてドイツ人の東方植民は最盛期を迎え、ドイツ人は森林地帯の開墾、鉱山開発にとどまらず、都市建設も行う。チェコ人はそれらの都市でドイツ人になんの問題もなく受け入れられている。このときにはボヘミアの都市でチェコ化の現象が生じたものである。（Rádl 1928, S. 63）その後もドイツ人の移住はとどまることなく、14世紀末まで続く。プラハでドイツ人が圧倒的に多かったのは旧市街と小市街である。またドイツ人だけでなくイタリア人やフランス人移住者もたいは小市街で市民権を取得している。この一方、カレル一世が建設した新市街は最初からチェコ人市民のほうが多かった。（Vgl. Mayer 1928, S. 256ff.）

ドイツ人市民の出身地は、北ドイツ（ザクセン）、南ドイツ（バイエルン、ヴィルテンベルク、バーデン、プアルツ、エルザス、ラインラント、ヴェストファーレン他）、中部ドイツのカトリック地域など。またエルツ山地の鉱山都市、シュラッケンヴェールト（チェコ名オスツラフ、Ostrav）、ヨアヒムスタール（チェコ名ヤーヒモフ、Jáchymov）からは鉱山労働者が鉱山業の衰退と共に、および両都市近郊の瘦せたテプラル（Teplár）高地から少なからぬ人々がそれぞれの時代に移住している。ド

イツ人以外ではスイス人、フランス人、オーストリア人、オランダ人、ベルギー人がある。(Vgl. Ibid., S. 256ff.)

フス主義、フス派戦争(1419-36年)はドイツ化への反動が長期間成功した数少ない事件である。このときはドイツのみならず、外国からの移住が中断した。したがって15、16世紀はドイツ語の勢力が弱く、多くの公文書でもドイツ語が使用されなくなった。1520年以降、ブラハでは市政記録はすべてチェコ語で作成されている。また、1521年、ブラハでミュンツァー(Th. Müntzer, 1489-1525年)がドイツ語で説教を行っても、理解するのはドイツ人の商人、手工業者、教養ある市民という限られた人々に過ぎないという状況だった。(Vgl., Skála 1990, S. 228)

さらに、1457-1516年、旧市街は1,062人の移住者を受け入れている。その中には氏名からドイツ人と見られる人はわずかに15人である。しかし、公文書に残っているのは市民権を得た移住民だけである。したがって移住民の実態を完全には掌握できない。市民権を得なかった人々は労働者、下働きの職人、使用人であり、その中にはドイツ人も多数いた。

この時代のチェコ語の書き言葉を「チェコ語の黄金時代」と評価するのは民族復興期のチェコ語の純粹主義である。スカーラによれば、ドイツ語が公文書で再び確認されるのは、1544年ツロツパウとレオプシツにいたヴェンツェル(Wenzel)が認めた二通の書簡の写しである<sup>11</sup>。

17世紀から19世紀中頃まで、ブラハ市民の上流階級ではドイツ人が圧倒的に多くなる。彼らは社会活動によって、政治・経済関連の権利を獲得し、チェコ人の社会で上流階級を形成する。(Vgl. Mayer 1928, S. 256ff.)

1615年ボヘミア領邦議会、言語法議決。チェコ語の優位を保証する。それにはボヘミアで市民権を得た外国人はその子にチェコ語の授業を受けさせなければならない。政府機関はチェコ語で審理を行わなければならない。1605年までにチェコ語を使用し、その後ドイツ語使用となった学校は、再びチェコ語を使用する学校とならなければならない、などと規定されていた。(Povejšil 1980, S. 6)

また、ボヘミアの子供全員にチェコ語を学ばせ、チェコ語を自在にする子は両親の死後、二倍の相続分と不動産を得、チェコ語を自在にできない子は両親の死後、金銭のみを相続することを得る、という相続法も

設定された。この法律は、チェコ語を習得しない外国人を領邦では住民として、都市では市民としては受け入れないという、一部支配階級の排外主義の表れであった。しかし、チェコ語学習の確認やチェコ語能力の判定基準が不明確などの問題をはらんでいたため、(Vgl. Rádl 1928, S. 73) 重罰規定を伴っていたにもかかわらず、実効性がなく、ドイツ化の阻止には効果があがらなかった。(Vgl. Skála 1964, S. 100)

ビーラー・ホラの戦闘の結果、カトリック側の勝利、プロテスタント側の壊滅でカトリック化が強力に、そして着実に推進され、これと共にドイツ化も進行する。30年戦争終結後、プラハおよびボヘミア全土のチェコ語、チェコ語関連の事柄は徹底的な損害を被った。しかしその原因は、チェコ人の戦死というよりも国外移住、加えてペストの流行でチェコ語の使用者が激減したからである。(Vgl. Povejšil 1980, S. 7)

またチェコ人貴族の多くはプロテスタントだったので領邦を去らなければならなかった。彼らに代わってやってきたのは中西部ヨーロッパ文化に属するドイツ人、イタリア人、スペイン人、ヴェロン人だった。(Vgl. Mayer 1928, S. 269) 貴族の民族構成はこうして激変する。いずれにしてもチェコ語にとって有益な変化ではなかった。

1627年、改訂領邦条令発布。現在の憲法に相当するこの条令ではチェコ語とドイツ語との同権が認められた。とはいうもののプラハでは状況からドイツ語使用の追認に過ぎなかった。「同権」から両言語の自由競争が生じ、政治・経済・教育の分野でドイツ語の方が次第に多く使われるようになった。領邦の官房、市の官職の審議でドイツ語の使用が次第に要求され、チェコ語の使用が遠ざけられた。(Vgl. Trost 1965, S. 24) チェコ語の優位を保証した1615年の言語法も意味を失ってしまう。

17世紀中期以降、新市民はチェコ人よりドイツ人の方が多くなる。プラハ新市街ではまだチェコ人の方が多かったが、小市街ではルードルフ二世(Rudolf II, 在位1576-1612年)の時代からドイツ語が圧倒的に使われ、ドイツ国内と変わりがなかった。(Vgl., Povejšil 1980, S. 7)<sup>12</sup>

ドイツ化の頂点は啓蒙時代のヨーゼフ主義のさなかに見られる。1784年、ヨーゼフ二世、言語令発布。教育が従来ラテン語からドイツ語で行われることになって、ドイツ語の優位が確定した。一方、チェコ語は

ドブロフスキー (J. Dobrovský, 1753—1829年) をして、「卑しい人間の話し言葉であり、教養ある、啓蒙された国民の話し言葉でも、書き言葉でもない」と言わしめるまでになる。(Vgl. Trost 1965, S. 25)

ポヴェイシルによれば、プロテスタントの禁止は17世紀末から18世紀前半にかけて、プラハをドイツ人の植民地化とすることでもあった。これは1918年まで続く。(Vgl. Povejšil 1980, S. 117) このようなことからチェコのドイツ化は一般的に、プロテスタントに対抗するカトリック化を関連させて扱われる。

### 3.1. ドイツ化の実際

ルター主義の浸透はドイツ人とチェコ人ともに友好的な関係をもたらした<sup>13</sup>、これはドイツ人のボヘミア移住に好都合となった。ドイツ人の新市民は普通プロテスタントだったので、ウトラキスト派のチェコ人に好意を持って迎えられた。そして彼らは規則にもかかわらず、一定期間内にチェコ語を習得することもなかった。(Vgl. Skála 1972, S. 285)<sup>14</sup>

こうして市民階級でもドイツ化が進行する。プロテスタントのチェコ人貴族もドイツ人と良好な関係ができ、ドイツ化への抵抗が弱まった。この頃、貴族はチェコ人が圧倒的で、ルター主義を背景にドイツの精神文化、ドイツ人さらにはロマンス系民族の文化をも摂取した。(Vgl. Mayer 1928, S. 269)

チェコ人貴族の多くは自分の子供にドイツ語を学ばせ、ドイツの大学へ行かせた。またドイツ人はボヘミアの経済活動、特に鉱業分野に深く関わっていたので、反ドイツ人政策も自然に弱まった。(Vgl. Ibid., S. 261ff.) ドイツ人がボヘミアから立ち去ったならば、経済活動の衰微が火を見るより明らかだったのである。ドイツ化と共に経済的、文化的に生活が豊かになり、ドイツ人が持つ各分野の高度な技術に需要が高まった。経済的あるいは文化的に上流階級に属するようになった人々はドイツ語の言語共同体に順応していく。(Vgl. Povejšil 1980, S. 8)

プラハの巷ではチェコ人の営業活動だけでは消費者の要求を満たすことができなかった。チェコでは薬剤師、リボン織工、金属加工業、毛皮加工職人、仕立屋、家具職人、宝石磨き、金細工師などの職業はドイツ

人の方が技量が上だった。一方、チェコ人といえば、皮なめし、機織り、製靴業、パン屋、製粉業、肉屋が多かった。職業上、一種の棲み分けが見られた。したがって使用言語から「ドイツ語＝金持ち、チェコ語＝貧乏人」という構図が出現していた。

ルードルフ二世の時代に起こった建築ラッシュでプラハにやってきたイタリア人は大工や左官の棟梁だった。30年戦争後はイタリア人の商人、銀行家がやってきた。またカツラ屋は専らフランス人だったが、後にはドイツ人、ボヘミア人、モラヴィア人も営業している。(Vgl. Mayer 1928, S. 264ff.)

ドイツ人とチェコ人との混交はピーラー・ホラの戦闘以前から激しく、ドイツ人の社会的な影響は大きかった。こうしたなか1587年、コルディンシュ(Koldinsch)法でチェコ語での職務遂行が公務員に規定されるが、ドイツ人市民にはドイツ語で処理がしばしば行われている。(Vgl. Povejšil 1980, S. 6)

### 3. 2. ドイツ化の収束

1760年代および70年代のプラハでの文化生活および学問の世界、加えてマスコミニュケーションはドイツ語のみで展開する。というのはチェコ語はこの時代、文化語としては存在していなかったからである。

19世紀が近づく頃、産業活動がチェコ人労働者を地方からプラハに多数引き寄せる。彼らはしかし市民階級になる可能性が低かったので、ドイツ語を学ぶ義務も必要もなかった。ドイツ化収束の兆しである。このような下層階級から19世紀冒頭、プラハをチェコの都市に変え、民族復興の時代を動かす民族意識にあふれた人々が輩出する。(Vgl. Ibid., S. 9)

民族復興の運動はヘルダーの影響を受けている。それから、チェコの愛国者はシラー、シュレーゲル、ヘーゲル、反ユダヤ主義の最初の人物といわれるフィヒテなどドイツのロマン主義者に傾倒している。チェコ人はヘルダーの理論を拡大したフィヒテの影響を特に受けている。フィヒテの「言語は時と共に変化はするが、それは自らであり、外国語の要素の受け入れはその本質に反している」は当時の言語純粹主義に歓迎されたはずである。ロマン主義では言語は民族の真の尺度である。国家を



言語によって分けるのが最も重要である。その理由は、言語が人々の精神を結びつけるだけでなく、同一の言語使用が同一の起源を証明するからである。言語の統一は共同体所属性を証明する。19世紀のチェコ人はこのような思想を背景に民族復興期を体験する。(Vgl. Rádl 1928, S. 131ff.) そして民族復興は少なくともドイツ人によってもたらされたのではない。(Mayer 1928, S. 276.)

民族復興期の1848年4月8日、ボヘミア憲章が発布される。これにより改訂領邦条令以来、行政と教育でのドイツ語優先に終止符が打たれた。チェコ語が文化的に劣るという考えも払拭された。人口急増のプラハではドイツ人を少数民族の立場に追いやる遠因ともなった。(Vgl. Ibid., S. 276ff.)

3.3. ここで少しまとめを行っておこう。チェコへ西からやってきた文化は実際はドイツからやってきた。チェコ人は、中世の生活の文化基盤である都市法、商業、鉱業、キリスト教などで、またルクセンブルク朝期では貴族の生活でドイツ人を模範にしている。「ドイツ化」で言及したように、ボヘミアの都市もドイツ人によって建設され、後からチェコ人が移住した。ドイツ人はチェコ人を抵抗もなく受け入れた。反ドイツを掲げたフス主義の時代であっても、その宗教活動の発端をドイツ人に見ることができる。(Vgl. Rádl 1928, S. 163ff.) 時代が下って、マリア・テレジア (Maria Theresia, 在位1740-1780年) の時代、チェコ語を再評価したのはドイツ人であり、チェコの過去に熱意を注いだのも多くはドイツ人だった。

このように、チェコ人は歴史のいつであれ、ドイツ人の影響を常に受けている。チェコ人にとってドイツ化は西欧のあらゆる要素を摂取するためには避けて通れない過程だった。そしてドイツ語は西欧文化を取り入れる窓口だった。

#### 4. プラハのドイツ語

4.0. プラハのドイツ語は記録上、市政記録に表れる14世紀前半から20世紀過ぎまで存在したと言える。しかし、話し言葉としては、ドイツ

人東方植民の11世紀からと推定できる。プラハのドイツ語は今まで見てきた限りにおいても、歴史に翻弄された言語であることが理解できよう。そこでこの特殊語の中世から現代に至る歴史的連続性に興味を持たれるが、これは次の論考で扱う。今は、「ゲルマン語学者は中世後期のプラハのドイツ語が近代の、模範的なプラハのドイツ語に繋がっていると信じていた」<sup>15</sup>、という情報を挙げるに止める。

ボヘミア領邦のドイツ語使用域では、話し言葉として田舎の様々な方言、都市では方言色の濃い日常語、チェコ語使用域ではドイツ人、ユダヤ人、ウトラキスト派、チェコ人公務員の使うドイツ語があった。そして、プラハでは貴族を始め市民や職人の言語生活でプラハのドイツ語は不可欠であった。ドイツ人都市貴族はドイツ語使用であった。チェコ語を使用しなくても日常生活に支障が無かった。職人は二言語併用だった。さらに社会的権利の少ない人々は大部分チェコ語のみで生活していた。(Vgl. Skála 1964, S. 73) ここにチェコ社会の政治・経済状況による人々の階層を言語使用に見ることができよう。チェコ語でのみ生活する人々は下層階級に属し、いつの時代でも人口に占める割合が大きい。そして彼らは常に歴史の表舞台に立つことはない。

農村地帯では農民の入れ替わりが少なく、その孤立言語も数百年以上安定し得る。しかし孤立言語都市であるプラハでは言語使用者の入れ替わりが激しく、また基本的に絶えることがなかった<sup>16</sup>。チェコへのドイツ人流入はドイツ文化を常に新鮮な状態に保つのに効果的だった。(Vgl. Mayer 1928, S. 272) 同様に、プラハのドイツ語も常に時代から取り残されることなく存在し得た。また住民の平均寿命が衛生環境から短く、世代が続くということもあまりなかった。それにもかかわらずプラハのドイツ語が存続し、時に拡大し得たのは、プラハがドイツ人を常に受け入れたからである。

たとえば、ツンフトの制度により、遍歴を数年経て、故郷から離れて定住する者にとって、プラハを始め大都市は彼らに魅力的に映った。(Vgl. Kranzmayer 1962, S. 119) また親類縁者や知人、友人を頼って移住という場合もあった。(Vgl. Mayer 1928, S. 271)

こうしてプラハのドイツ人市民はドイツのあらゆる領邦からやってき

た人々の混成体となり、彼らのドイツ語では自然に方言の特徴が薄れていった。したがって発音も方言とは異なり、それ自体の発音すら形成され、また独特の形態を見せるに至ったのである<sup>17</sup>。したがって、プラハのドイツ語がライバハ (Laibach, 現在、スロヴェニアのリュブリャナ, Ljubljana) のドイツ語、トリエントのドイツ語と非常に類似し、さらには古オーストリア標準語とも1918年まで瓜二つの時もあったということも、(Vgl. Kranzmayer 1962, S. 120) 各地からドイツ人が移住したことを考慮すると理解できる。

ところで、クランツマイアー (1897-1975年) によると、ケルンテン州の裕福な市民層は、彼の青春時代まで、子供をライバハに留学させて正しいドイツ語を学ばせる習慣があった。チロルではトリエントが、ウィーン、ニーダーエースタライヒ、オーバーエースタライヒではプラハが留学先であった。(Vgl. Ibid., S. 120)

20世紀初頭、プラハはすでにチェコ人の都市であり、ドイツ人は少数民族であった。数の上ではドイツ人はチェコ人の比ではなかったが、社会的に重要な地位についていた。たとえチェコ語が領邦言語として承認されていても、1918年のハプスブルク帝国崩壊まではドイツ語の特権はオーストリアの帝国言語として守られていた。その年10月、プラハの国民委員会、チェコスロヴァキアの独立を宣言。プラハ政府は同年11月末までにチェコのドイツ人地域を占領した<sup>18</sup>。このような一連の事件は当然プラハのドイツ語の存続に影響を与えずにはおかない。

とはいうものの、社会生活に急激な言語変動が訪れたのではない。個人生活や公共の場でのドイツ語が排除されたということはない。「相変わらず、ドイツ語を使用する社会があり、ドイツ語の学校、有名な報道機関、優れた劇場などの公共施設が存続していた。」(Vgl. Trost 1981, S. 387)

20世紀になると「純粹で模範的な」および「よくない」と形容されるプラハのドイツ語に大別される。前者はルクセンブルク王朝期、混交と研磨とで成立した古いプラハのドイツ語から直接発展した、と見なされた。しかし中世末期のプラハのドイツ語と同後期のそれとの関連は完全に否定されている。後者は「ボヘミアードイツ語」であり、チェコ語の

影響を受けた混交俗語である。ボヘミアードイツ語の使用者は子供の時からチェコ語を第二の日常語として使用する人、ウトラキスト派の人である。ボヘミアードイツ語は「小市民的で無教養な」言葉であり、上流階級はこの変種をできるだけ使わないようにしていた。(Vgl. Ibid., S. 385ff.)

#### 4.1. プラハのドイツ語の終焉

言語の存続はその使用者数に左右される。プラハのドイツ語ではさらに社会的な条件も考えなければならない。プラハにドイツ人がかつてのように移住しなくなった事自体、プラハのドイツ語の将来を暗示していた<sup>19</sup>。19世紀後半から20世紀前半にかけて、ターフェ (E. Taaffe) がチェコ語とドイツ語とを同等の公用語とし、バデーニ (K. Badeni) が言語令で裁判所と行政官庁とでチェコ語とドイツ語の使用を試み<sup>20</sup>、1926年2月施行のチェコスロヴァキア憲法が国家官庁の使用言語をチェコ語と規定したのも、ドイツ語の勢力が退潮期にある時代の事件であった。

社会の変化と共にプラハではドイツ語が通じる場面が日々減少していった。そしてプラハのドイツ語は孤立する。チェコ語に囲まれたドイツ語についてマウツナー (F. Mauthner) は1918年、「ボヘミアのドイツ人はチェコ人領邦民に囲まれて、その言葉には生気がなく、貧困である」と言語状況の厳しさを伝えている。(Vgl. Trost 1981, S. 388)

今日、プラハのドイツ語は過去のものとなっている。このドイツ語を話したり聞いたりする人やこの特殊言語について情報を持つ人はもう多くない。使用者が減少し続け、また日常生活で通用範囲が徐々に縮小していった<sup>21</sup>。プラハのドイツ語の社会的な価値が薄れてしまったのである。「プラハのドイツ語は終焉の時、ドイツ語で述べようとするチェコ人の言葉であって、ドイツ人はあまり使わなくなっていた」とさえも言われる。「プラハのドイツ語はカフカの時代、死んでいた。事実上、死にゆく言語」に文学的な創作活動は無縁である<sup>22</sup>。カフカの作品は1913年以降発表されているので、これ以降プラハのドイツ語が時と共に消滅していったと推定できる。なお、カフカはプラハのドイツ語で文学活動を行っていない。

5. プラハのドイツ語の評価は肯否定様々である<sup>23</sup>.

5.0. 肯定的な評価

1. プラハのドイツ語は17世紀にはJ. グリメルスハウゼン (Johann Jakob Christoffel von Grimmelshausen, 1621–1676年) の „*Teutscher Michel*“ で訛がない、と称賛されている：「プラハの小市街ではドイツと同じくすばらしいドイツ語が話される。つまりそのドイツ語を話す人には言葉を乱す農民が周囲にいない」からである。(Trost 1962, S. 32)

2. プラハの書き言葉のドイツ語は18世紀の50年代から75年代まではまだオーストリア方言の特徴があり、話し言葉の方がその特徴を長く残していた。当時の純粋主義的な言語批判は1770年代、マスコミで展開され、オーストリア方言の特徴を弱めた。このためハプスブルク帝国で最良のドイツ語という評価を得た。

プラハのドイツ語はウィーンで高く評価された。というのは、明瞭なアクセントを捨てきれないウィーンの人々にとって「話し方が標準語的であり」、純粋ですばらしかったのである。(Vgl. Povejšil 1980, S. 115ff.)

3. プラハのドイツ語は19世紀まで、ニーダーエステライヒ、オーバーエステライヒおよびウィーンにとって、ハプスブルク帝国の最も美しいドイツ語であった。(Trost 1962, S. 31)

4. プラハのドイツ語は純粋で上品である、という評判はあった。19世紀にはプラハのドイツ語は実際、ハプスブルク帝国では最も純粋で、最良のドイツ語と見なされていた。三月前期 (1815年のウィーン会議以降)、プラハのドイツ語の発音は模範的だと評価されていた。優れたプラハのドイツ語は小市街のドイツ語やウトラキスト派が使うドイツ語とは全く異なっていた。(Trost 1965, S. 27)

5. 19世紀後半にプラハのドイツ語がオーストリアで「模範的」の評価を得たのは、オーストリア、とくにウィーンでは発話活動でオーストリア風となった発音が著しかったからである。後にプラハのドイツ語は「プラハの劇場ドイツ語」と皮肉られる。これは「改まった」と形容され、既述のように上流階級が使用を避けたボヘミアードイツ語とは対照的であった。(Vgl. Trost 1981, S. 383)

6. ミュレンホフ (K. Müllenhoff) の、新高ドイツ語の書き言葉がプラハのカール四世の宮廷で成立したとの見解は久しく受け入れられ、したがってプラハでは最良のドイツ語が使われるという、19世紀末に表れた評価の要因となっていた。この評価が広まるのはオーストリアおよびプラハである (Vgl. Trost 1962, S. 31)<sup>24</sup>。

7. プラハに住むドイツ人は各地からやってきた移住者の混成体だったので、プラハのドイツ語はおそらく初めて、他の方言とは無関係の、すなわち独自の発音を持つことができた。このため、プラハのドイツ語は20世紀になっても、「最も美しく、最も純粋な話し方の評判を」得ていた。(Kranzmayer 1962, S. 120) スカーラはこの意見の前段について「19世紀のプラハのドイツ語の実状に近い」と、理解を示す<sup>25</sup>。しかしシュヴァルツ (E. Schwarz) は「近代のプラハのドイツ語は理解しづらく、地域的、社会的相違があり、模範的ではない」と見なしている。(Vgl. Trost 1981, S. 382ff.)

### 5. 1. 否定的な評価

1. ゴットシェート (J. Ch. Gottsched, 1700—1766年) から19世紀初期まで、オーストリアのドイツ語は良くない、という意見がドイツ国内で一般的だった。プラハのドイツ語も例外ではない。(Povejšil 1980, S. 113)

2. 1787年、旅の外国人の批評がある：「プラハではドイツ語の使用は大部分がまずい。教養人ではまだ純粋であり、オーストリア風の語調を時には耳にする。」教育を受け、啓蒙された人々のドイツ語は純粋である。そのような人々の手本はザクセンドイツ語の書き言葉であり、オーストリアのドイツ語ではない。純粋なドイツ語とはマイセンのドイツ語であり、「良くないドイツ語」とはオーストリア風の語調とチェコ語とが混交したドイツ語である。この頃マイセンのドイツ語は外国の啓蒙主義の文学をボヘミアにもたらし、ボヘミアでは書籍印刷の模範であった。

チェコ語を母語とする人々のドイツ語は、チェコ語とオーストリア風の語調が混交して、明らかに良くない。(Vgl. Trost 1962, S. 32, またVgl. 1981, S. 382)

3. プラハでドイツ語使用者が少数派になると、プラハのドイツ語は、チェコ語に囲まれて、もはや発展の望みはなく、それゆえ不妊で、ゲットー内の特殊言語であり、使用されるのは日曜日と祭日に限られる、と批評される。(Vgl. Trost 1981, S. 387) まさに、夏、クズが樹木を覆うように、チェコ語に覆われたドイツ語なのだ。

しかし、プラハのドイツ文学に携わる人々は、「的はずれだ」と否定した。「小市街のドイツ語がプラハのドイツ文学を脅かしている」という意見にも、笑止なことと無視した。例えば、プラハ文学界の著名なドイツ語作家、プラハ学派のメンバーでもあるウルツィーデイル (J. Urzidil, 1896-1970年) はこう書いている：我々プラハのドイツ人作家は、昼間使用した言葉で書きものをする。それは純粋な標準ドイツ語である。昼間使用した言葉を別なドイツ語に替えて著作に取りかかる必要はない。(Vgl. Ibid., S. 387ff.) また、「最良のドイツ語はプラハで話される」<sup>26</sup>との発言では、1939年43歳で故郷のプラハを後にし、ローマで没した作家が母語に抱く愛着あるいは郷愁がまさっているのかもしれない。

注

- 1 本論は2001年12月21日、関西大学逸文学会第94回研究発表会で口頭発表された原稿に基づく。「チェコ」は西部のボヘミア、東部のモラヴィアを合わせた呼称。「ボヘミア」すなわちBöhmenにはボヘミア人の故郷という意味がある。「チェスケーゼミエ」(České země) はチェコ全体の領土を指す表現である。本論ではこうした事柄を念頭に置いて、「チェコ」「ボヘミア」を基本的に区別しない。また、チェコ語、ドイツ語それぞれの歴史的呼称を使用しない。
- 2 Vgl. Skála, Emil: *Die Entwicklung des Bilinguismus in der Tschechoslowakei vom 13. – 18. Jahrhundert*. In: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur*, Bd. 86, 1964, S. 74.
- 3 アンリ・ボグダン『東欧の歴史』高井道夫訳 中央公論社 1993年 50ページ。
- 4 Vgl. Rádl, Emanuel: *Der Kampf zwischen Tschechen und Deutschen, Böhmen*, 1928, S. 31ff.
- 5 そのほか『コスマスの年代記』(12世紀前半)も。十河健二『チェコ語にお

- ける純粹主義の生起消滅』関西大学『独逸文学』1999年 43号 173ページ参照, またVgl. Skála 1964, S. 74ff.
- 6 Vgl. Auty, Robert: *Lexikon des Mittelalters*. Bd. 7, Artemis Verlag, München, 1983, Spalte 159.
  - 7 Vgl. Mayer, Theodor: *Zur Geschichte der nationalen Verhältnisse in Prag*. In: *Aus Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, Gedänkschrift für Georg von Below*, Stuttgart 1928, S. 256.
  - 8 チェコ名, ドイツ名はそれぞれStaré Město: Alte Stadt, Nové Město: Neue Stadt, Hradčany: Hradschin, Malá Strana: Kleinseite.
  - 9 チェコ語に起こった言語純粹主義については十河1999年参照.
  - 10 I. プロテスタント教会, 福音主義教会とも. 本論では「プロテスタント」, またカトリック教会も多くの参照文献にならって, 「カトリック」とのみ表記する. II. Vgl. Povejšil, Jaromír: *Das Prager Deutsch des 17. und 18. Jahrhunderts*, Helmut Buske Verlag, Hamburg, 1980, S. 7.
  - 11 I. Vgl. Trost, Pavel: *Deutsch-tschechische Zweisprachigkeit*. In: *Deutsch-tschechische Beziehungen im Bereich der Sprache und Kultur; Abhandlungen des Sächsischen Akademie der Wissenschaften zu Leipzig. Philolog.-hist. Kl. Bd. 57. Heft 2*. Berlin, 1965, S. 25. II. 「民族復興」期のチェコ語の純粹主義は『クラリツェ聖書』(1579-1593年)にチェコ語の基準を見だし, その当時に当てはめようと試みた。(十河1999年, 178ページ参照) III. Skála, Emil: *Die Stadtsprachen im Böhmen zwischen Hus und Münzer*, In: *Zeitschrift für Sprachwissenschaft, Linguistische Studien 208, Reihe A*, 1990, S. 236. IV. ツロップパウ, Troppau: 現在のオパヴァ, Opava. レオプシッツ, Leobschütz: 現在ポーランド領グウブチツェ, Głubczyce.
  - 12 プラハへの移住民記録を最後にあげる.
  - 13 Martin Luther (1483-1564年). プロテスタントの一つであるルター教会は1530年創始. なおルターの神学思想はプロテスタント教会の原理となっている.
  - 14 Vgl. Skála, Emil: *Zum Prager Deutsch des 16. Jahrhunderts*. In: *Festschrift für H. Eggers zum 65. Geburtstag*. 1972, S. 285.
  - 15 Vgl. Trost, Pavel: *Die Mythen vom Prager Deutsch*. In: *Zeitschrift für deutsche Philologie*, 100. 1981, S. 382.
  - 16 Vgl. Kranzmayer, Eberhard: *Hochsprache und Mundarten in den österreichischen Landschaften*. In: *Wirkendes Wort, Sammelband 1*. 1962, S. 119.



## プラハのドイツ語について

- 17 I. 硬子音を表すためにhを、tあるいはkに添える。例：gethan, thaten, Er hats nit thuen wollenやkhan, khainer, zue Ruckh (zurückと発音)。(Vgl. Skála 1990, S. 237) II. 16世紀のプラハのドイツ語では子音の重なりが見られる：sehett, hörett, geczeugett, achttなど。またffurten (führten), oft, ergreifenなど。(Vgl. Skála 1972, S. 289)。III. 17世紀の法廷証言録ではihrschpert (1601年), erschpricht (1618年), wirschtehen (1621年)。またssの綴りも見られる：sie sSprach, Ssirnbogen (1618年)他 (Vgl. Povejšil 1980, S. 110ff.) IV. ai, ei, äu, euは全てaiと発音される (19世紀)。(Vgl. Skála 1966, S. 90)
- 18 南塚信吾『ドナウ・ヨーロッパ史』新版 世界各国史 19, 山川出版社 1990年 271ページ以降参照。
- 19 早くは1749年, マリア・テレジア, 神聖ローマ帝国内の都市で外国人の受け入れを禁止。(Vgl. Mayer 1928, S. 273)
- 20 「ターフェの言語令」, 1880年。「1897年の言語令」, 1897年。
- 21 傍証としてドイツ人あるいはドイツ語使用者の減少を示す統計を最後に挙げる。
- 22 Trost, Pavel: *Das späte Prager Deutsch*, In: *Germanistica Pragensia II*, 1962, S. 31ff.
- 23 対象が何であれ, 評価行為では評価基準や評価の背景分析が重要であろうが, 本論では評価の事実のみを列挙する。
- 24 この成立史は明確に否定されている。(Vgl. Trost 1981, S. 382.)
- 25 Skála, Emil: *Das Prager Deutsch*, In: *Zeitschrift für deutsche Sprache*, 22, 1966, S. 90.
- 26 I. Vgl. N. O. Scarpi, *Prager Deutsch*, In: *Du*, 1998, Issue 688. S. 26. II. J. ウルツィーディル, プラハ生まれ。著作家。ヴェルフエル (F. Werfel) やカフカと親交があった。移住歴：1939年, イギリス, 1941年, ニューヨーク。

参 考

1. ブラハへの移住者

| 西暦         | ドイツ人 | チェコ人 |                           |
|------------|------|------|---------------------------|
| 1671-1680  | 105  | 70   |                           |
| 1681-1669  | 270  | 160  |                           |
| 1691-1700  | 220  | 140  |                           |
| 1701-1710  | 220  | 140  |                           |
| 1711-1720  | 280  | 150  |                           |
| 1721-1730  | 250  | 170  |                           |
| 1731-1740  | 240  | 140  |                           |
| 1741-1750  | 200  | 129  |                           |
| 1751-1760年 | 320人 | 110人 | (Vgl. Mayer 1928, S. 265) |

2. チェコ人とドイツ人との割合等

- 1 1910年, ブラハでドイツ語を話す住民はわずかに4,5%。(Skála 1966, S. 91)
- 2 ブラハでは1914年まで市民のうち35,000人がドイツ語を話し, 約50万人がチェコ語を話していた。(Scarpi 1998, S. 26)
- 3 1930年ブラハの人口848,000人, そのうち42,000人(約4,95%)がドイツ語を話す。(Skála 1966, S. 91)
- 4 1920年の国勢調査: ブラハのチェコ人624,744人, ドイツ人30,429人(約4,87%)。(Skála, Emil: *Der deutsch-tschechische Bilinguismus*. In: *Sprachwandel und Sprachgeschichtsschreibung, Jahrbuch des Institut für Deutsche Sprache*. 1977, S. 275)
- 5 1930年, チェコスロヴァキアにドイツ人3,231,688人居住(国民全体の22%)。(Ibid., S. 275)
- 6 1970年, ブラハのチェコ人1,053,315人, ドイツ人936人(約0,09%)。(Ibid., S. 275)
- 7 1961年3月1日現在, チェコスロヴァキア在住ドイツ人140,402人, 1970年12月1日現在, 同85,663人, 1976年1月1日現在, 同7,900人(チェコ在住7,500人, スロヴァキア在住400人)。(Ibid., S. 275)
- 8 チェコ共和国, 人口10,362,553人(1990年)。内ドイツ人は0,5%。(『東欧を知る事典』伊東孝之 平凡社 1993年 657ページ)

## Über das Prager Deutsch

Kenji SOGO

Die Stadt Prag war eine deutsche Stadtsprachinsel, wo ein Prager Deutsch seit der deutschen östlichen Besiedlung gesprochen wurde. Prager Deutsch ist zwar heute ein schon ausgestorbenes Idiom, aber es war früher in Prag oder der Habsburger Monarchie hoch geschätzt. Heute gibt es nur noch wenige, die über das Idiom informieren können. Hier möchte ich das Prager Deutsch in geschichtlichen Umrissen zeichnen und seine mannigfaltigen, politischen, wirtschaftlichen und kulturellen Aspekte mit einigen Anmerkungen dazu ansprechen. Betrachtungen zu Wortschatz und syntaktischer Struktur werden nicht angestellt.

Zum Verständnis des Prozesses der Sprachentstehung sind wichtig: 1. Eine kurze geschichtliche Betrachtung Böhmens, besonders bis zur Blütezeit Karel I. 2. Ein Geschichtsabriss der Stadt Prag, die von Anfang an als Verkehrs- und Tauschzentrum an der Moldau eine Rolle spielte. Die Entwicklung Prags war auf die wirtschaftlichen, politischen und kulturellen Aktivitäten der übersiedelten Deutschen angewiesen. Inzwischen bildete sich ein Prager Idiom; es unterschied sich von einer innerdeutschen Mundart, da aus verschiedenen Orten Deutsche in Prag zusammenkamen. 3. Ein Blick auf die Verdeutschung, ohne die von Prag und Böhmen nicht die Rede sein kann. Deutscher Einfluß auf die Tschechen beginnt schon seit der Ost-Besiedlung und nahm nach der Schlacht am Weißen Berg (1620) lebhaften Fortgang. 4. Die Frage nach dem Prager Deutsch, das spätestens um die Mitte des 20. Jahrhunderts, bedingt durch historische Faktoren, erloschen sein soll. und 5. Ansichten zur Einschätzung des Prager Deutsch. Hier handelt es sich um einige positive und negative Meinungen zu dem Idiom. – Die historischen Vorgänge (1), (2) machen die Idiom-Ausbildung (3), (4), (5)

verständlich.

Diese einleitende Studie ist Teil zum Thema, *Deutsch, wie es in Prag gesprochen wurde*. An sie wird sich eine weitere Arbeit zur zeitlichen Gliederung der Entwicklung des Prager Deutsch anschließen.